



## 座談会 日本人・日本文化・そして新人類

長谷川, 善計 ; 大野, 道邦 ; 岩崎, 信彦 ; 油井, 清光 ; 坂本, 直樹 ; 田中, 順子 ; 西川, 美紀 ; 滝, 良輔 ; 黒田, 佳伸 ; 寺角, 良平 ; カナシロ...

---

**(Citation)**

社会学雑誌, 5:189-207

**(Issue Date)**

1988-03-30

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCOI)**

<https://doi.org/10.24546/81010764>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010764>



# 座談会

## 日本人・日本文化

### そして「新人類」

司会

材木

和雄(28回)

文化科学研究科院生

長谷川

善計(1回)

神戸大学文学部教授

大野

道邦(13回)

神戸大学教養部教授

岩崎

信彦

神戸大学文学部助教授

油井

清光

文化科学研究科助手

坂本

直樹(32回)

文学部助手

田中

順子(16回)

職業安定所勤務

西川

美紀(23回)

前福井医科大学助手

滝

良輔(31回)

印刷会社勤務

黒田

佳伸(35回)

化学製品会社勤務

寺角

良平

文学研究科院生

カナシロ

フアン

文学研究科(ベル)

過

放

文学研究科(中国)

蔡

漢

文学研究科(中国)

古川

雅彦

文学部4年

渡辺

吉和

文学部4年

太田

衣吏子

文学部3年

西根

博樹

文学部3年

### 〈誌上参加〉

今西

長造(5回)

広告会社勤務

古川

信雄(6回)

レストラン経営

伊東

武夫(11回)

高校教諭

佐伯

善照(18回)

新聞社勤務

細川

裕子(23回)

主婦

渡部

幸子(34回)

高校教諭



司会 今日はお忙しいなかをお集まりくださりありがとうございます。今日は、岡高や貿易摩擦でいやおうなく世界のなかの日本を考えないわけにはいかなくなっていきます。日本社会ははつきりと一つの転機を迎えているので、この機会に日本人とは何か、日本文化のかかえている問題は何かを、話し合ってみたいとこの座談会を企画しました。難しいテーマですが、その分だけ気楽に議論していただきたいと思えます。それでは、留学生の方々に口火を切ってくださいましょう。

### 日本人は「会社の主人公」

カナシロ 日本人は、自分の国についてたいへん関心が深いと思えます。それに、外国人に日本人の印象について質問するのは、非常に日本人らしい行為だと思います（笑い）。今、世界中で「ジャパニーズ・ミラクル」について話されることが多くなりました。そのなかで、とくに私がかん心するのは、日本人の教育が高いことです。ペルーの場合、一般の人はあまり教育レベルが高くないので、一番の問題になっています。それから、日本の社会は非常にオ

ーガナイズされて、みんな勤勉であるのに驚きます。

蔡 私も日本人の勤勉さには驚きました。アルバイトをしたことがあります。正社員でもアルバイトの学生でも、みんな仕事を少しも怠けなくて数時間続けて働くのは普通のことです。それに、仕事が終わってから、「一緒に飲みに行こう」と誘われたら、自分の都合が悪くても断らずに一緒に行く。そして、自分の会社のことを「うちの会社」といったりしている。中国では、「労働者は工場の主人公である」と言われていますが、日本にきて、日本人の社員を見てはじめて、ほんとの主人公感とは何かということがわかります。（爆笑）

過 中国の場合、一生懸命働いている人と、あまり働いていない人がいます。どっちでも同じ給料を貰えますから。日本では「単身赴任」というのがあると聞いていましたが、いろいろと個人的なことがあっても会社のためにもかく行く、ということを実際に見てびっくりしました。非常に厳密に組織された資本主義社会なのだなと感じました。

蔡 このあいだカナシロ君と話していたのですが、日本人はみんなユニフォームみたいな服を着て会社に行っているけど、中国はどうなのというから、好きなものならなん

でもいい、といったら、ペルーも同じと聞いていました。

カナシロ 日本ではちょっと軍隊のような感じがします。

過 でも、日本人は親切ですね。知らない人に道をたずねると、丁寧に教えてくれます。今まで五〇人くらいに聞いて二、三人だけ不親切だったけれど。

蔡 そう、電車の中でぶつかったり、足を踏まれたりしたら、すぐごめんなさいと言われて。中国ではそんなこと全然ないです。ちょっとぶつかったら、みんな怒る。喧嘩しやすい。(笑い)

### 我々は積極的「集団主義者」ではない

司会 やはり日本人の勤勉や集団主義が強い印象を与えているようですが、そのあたり実際企業のなかではどうなのでしょう。滝さんどうでしょう。

滝 えー、私、二七歳、T印刷に勤めています。社員がだいたい三万人、年間の売上が六千億円位の会社で営業をやっています。集団主義ということですが、私は二つのレベルがあると思います。一つはシステムのレベル、もう一つは意識のレベルですね。システムのレベルというのは、

何かする場合に個人で対処するよりも集団でチームを組んだりしたほうが大きな成果が得られたりしますよね、それで集団であたるようにシステムを作るわけです。意識のレベルでは、横並びの意識というのか、「出る杭は打たれる」という諺にあるように、能力やパワーはあっても普段はそれを内に秘めて横並びで行きましょう、ということになるんです。ですから、別に会社のために働こうという意識はなかってでもですね、システムの面でも、横並びの意識の面でも、外から見れば会社人間、集団主義というように見えるんだと思いますよ。

大野 日本人には組織の効率化、技術革新といったことに何の疑問も抱かないで協力するという印象があるんですが、これはシステムと意識というレベルとどのようにかかわるのでしょうか。二つのレベルをつなぐような位置にあるように思うのですが。

滝 直接お答えすることにならないかもしれませんが、高度成長の時は一方でものすごいイノベーションがありましたけど、他方で企業そのものがファミリーだった、まあ家族主義的だったということがあったと思うんです。ところが、高度成長が終わって停滞期になるとイノベーション

ももちろん停滞するわけですが、同時にファミリーといふけどなんの血縁もないやないか、というように意識自体も変わってきていると思えるのです。

司会 そのあたりホヤホヤの社会人の黒田くん、どうですか。

黒田 やはり学生時代はヘマをやっても自分だけのことですが、会社ではそうも言ってもらえないわけですから、それなりに言動には気をつけています。若手の社員とも話したりするんですけども、会社組織に入り込んで会社のためという、そういう気持ちはもうほとんどないですね。自分の生活を良くするというか、自分のために働いているというんですか、その一、なにか外側に会社があって、自分が一生懸命がんばってお金も儲けることができ、その結果会社が良くなったらそれでいいんじゃないか、そういう気持ちの人が多いいみたいです。



▶ 長谷川 ▶ 大野 ▶ 岩崎 ▶ 油井

滝 そういう状況のなかで企業も模索していると思うんですが、その現われがCIなどですね。

### コーポレート・アイデンティティの意味

司会 そのCIというのは何ですか。

滝 コーポレート・アイデンティティの略称なんです。要するに今までの企業というのはこれがうちの企業やというのあんまりなかったわけです。で、この間の国際化をはじめ他と接することが多くなると、仕事をやっていくにあたって独自のアイデンティティを持たねばならなくなつたということですね。簡単な例をあげると、キャッチフレーズを作るとか、マークを決めるとかビジュアルなところで統一感を作っていくわけです。

岩崎 日本の企業があらためてCIなんかをやりだすというところに、もう一つわからないところがあったのですが、今のお話で少しわかったように思います。これまで、企業の凝集力は強いと言われてきたけれど、留学生の方々の話にもあつたように、無個性的な凝集力や競争力だったわけですね。それが、国際化のなかで通用しなくなってきたと

いうことなのですね。もちろん、ファミリー意識を持たない若い世代の従業員を引っ張っていくという面もあるんじゃないかな。

滝 ええ、外向けと内向けと両方の意味があると思います。

黒田 私の勤めるところは外資系ということだからでしょうか、CIというのはあまり言われていません。誰でもいつでもそれぞれの仕事をやるようにということで「標準化」が言われています。

### 世論がおかしい

司会 それでは最近の経済、社会の情勢についてももう少しお聞きしましょう。

今西 五回生の今西です。広告業界で仕事をしています。戦後の荒廃を知っている者としては、都市をはじめとしてその復興、発展には驚くものがありますが、しかし、すべての活動をエゴの欲求の具現化に向ける風潮が当然のようになって、他のために動くという意識が希薄になっているのは非常に問題であると感じます。企業は、一つの新

◀ 坂本 ◀ 田中 ◀ 西川 ◀ 滝

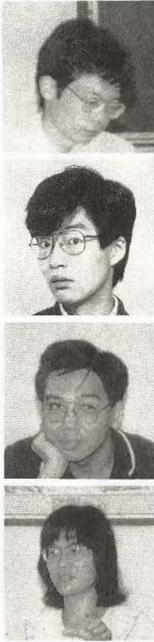


製品が成功するとすべてがそれに同調、追隨する姿勢が根強くあり、それが外的には集中豪雨的な輸出に至るといふありかたでは、国際社会のなかで非難にさらされるといふます。企業のココム違反、捕鯨の違約、円高利用の老人の海外移住などがその例としてあげられます。

佐伯 一八回生の佐伯です。私も新聞社で働いています。最近では関西新空港、京阪奈学研都市など関西でも巨大プロジェクトが進められ、新聞社も仕事が増えています。しかし、一〇年前にくらべるとマスコミ側もほとんど批判をせずに事実を伝えるにとどまっていますね。かつて、公害や住民の反対で歯止めがあったが、最近の地元自治体、企業などは不況を理由に「内需拡大」や「国家の要請」を受け入れている。新聞が世論を作るのではなく、世論が新聞を作るのだ、という基本になる世論そのものがなく、しに弱くなっていると思います。

古川(信) 六回生の古川です。戦後日本において良くなつたもの、これはズバリ言論、思想、結社などあらゆる面での“自由”だと思います。戦時中、兄の書齋で開いた岩波文庫にたくさんの方の伏せ字があつたことを鮮やかに思い出します。堀先生がご経験されたような研究の抑圧といったものがなくなつたこと、これは素晴らしいことだと思います。けれども、高度成長期、換言すれば高度競争期に知らず知らず身についてしまった、自分さえ良ければ他はどうなつてもよいという考えかたは転換してゆかねばならないですね。自分も相手も共により良い方向に導くという考え方、国際的公共心とでもいうようなものが必要なのではないのでしょうか。

### 国際化のなかで未熟な心性



▶ 黒田 ▶ 寺角 ▶ カナシロ ▶ 過

今西 そうですね、欧米のキリスト教的倫理観からは今の日本人のエセ仏教的考えは理解に苦しむところだろうと思いますね。

佐伯 高度成長下で文化や精神面が長らく空白になってきて、建前としての平和と民主主義のもとで、右傾化、戦前精神の復活の兆しがある。なにか国粹日本主義みたいなところにしか選択肢がないところに、日本人の未熟な心性が示されているのではないのでしょうか。日本に良いものが発展するとすればこの危機を乗り越えてからだと思いますね。

司会 職業安定所にお勤めの田中さんいかがでしょうか。田中 一六回生の田中です。私は職業安定所に勤めておりますので、労働行政に現れた変化について少しお話しさせてもらいますと、日本人のワークホリックぶりが世界の非難の的になっていくことから、率先して公務員から労働時間を短縮し、あわせて内需拡大をはかるべしということ、連続休暇の計画的取得を促す通達が流れています。労働基準法の改定の動きもあります。世間では、“生活を楽しむ” “遊びの精神” が言われてきていますが、勤勉と貯蓄、集団の秩序を守るといふ価値観が建前としては根強く生きて

いる社会ですから、なかなか「楽しむ」とか「遊び」とかいう新しい価値観を支える人間像のほうができていない現状です。学校教育でも家庭教育でも「努力」や「規則を守る」「先生や親の言うことをきく」ということから「自立した一人の人間になる」「個性を尊重し伸ばす」ということへ移行しなければならぬのではないのでしょうか。

油井 留学生の人たちとの研究会や日常的なつき合いをとおして感じるがあります。それは、日本人どうしの集団や人間関係の形成が「雰囲気」とか情緒のようなものにかに頼っているか、それを前提にしているか、ということです。正直いって、留学生の方々とつき合っていると、ちょっとした行動様式や生活習慣のちがいがから、行き違いを感じたり、時にはイライラしたりします。ということは、留学生の方々もきつとイライラしているんでしょうが。こういうときに考えることは、「以心伝心」というようなことが成り立たないということ、言語化され論理化されたコミュニケーションを充分豊富にかわさねばならないということです。逆にいうと、そういう形でのコミュニケーションを省略しても、ある程度ことがすんでいく日本人の人間関係というのは、実はこちらのほうがちょっと奇妙で無気

▲ 蔡 ▲ 古川 ▲ 渡辺 ▲ 太田



味なのではないかと感じられるわけです。こういう漠然とした情緒のレベルでの一体感を前提とする人間関係、さきに出た言葉では「集団主義」「無个性的」ということになるのでしょうか、そういう人間関係のしくみというのはどこからくるのでしょうか。これは日本人論全般の問題でもあるでしょうが、「日本的意識」といわれるものがどんな社会構造に見あったものとして形成されたのかという問題です。すね。

### 江戸時代にさかのぼれ

司会 日本人の精神性の歪みや未成熟といったことがかなり厳しく指摘されたわけですが、そのあたりを日本の文化的特質と関係させて考えるとどうなるのでしょうか。

長谷川 勤勉とか集団主義が特徴として上げられたわけ

ですが、それがどこからきているのかをはっきりさせないと学問的とは言えませんね。勤勉ということを考えて、欧米の場合は、まさにあのプロテスタンティズムの禁欲倫理があったわけですが、日本の場合はどうでしょうか。私はこの頃江戸時代の農村のことをやっているのですが、村定めでも五人組でもとにかく勤勉に働きなさい、遊興はいけない、バクチはいけないということを書いているのです。また集団主義にしても、近世の村落は他国に例を見ないほど高度に組織化されているわけです。それが、明治の村落構造の基礎の部分に根強く残っていつてるといえるでしょうね。そういう意味で、日本文化なり社会構造の特質を考える場合は少なくとも江戸時代までさかのぼらなければなりません。

岩崎　そうですね。学界でも江戸時代を見直そうという動きがでていますね。大石慎三郎、中根千枝編『江戸時代



と近代化』（筑摩書房、一九八六年）は二五人の研究者のオムニバスのシンポジウムですが、そこでは江戸

西根　司会・材木　時代を、暗い封建支配の時

代“から”近代を育んだ苗床“というように読み替えてみたらどうだろうという討論が行われています。印象に残っている論点は、兵農分離、秩祿封建制、小農民体制によって在地の有力階級が掃滅されたこと、それゆえ土農工商という身分制があっても階層間は職能的分業の性格も合わせ持っていたこと、階層内では同質的なので競争が激しかったことなどです。そして、村請け制、町請け制が発達して在地において集団自治は庶民的に普及し、下から上へ組み上げた社会となっているが、その自治は中央権力にたいしては強いとは言えないことです。

長谷川　江戸時代の武家政治は武官が文官の役割をしはじめたわけですね。だから武士の精神がかなり官僚的、文官的に転化していくのですが、やはり武器を持っているのはかれらだけで、民衆のほうから反乱が非常に起こしにくい。中国の場合は、すぐに反乱が起こるんです。それに村むらの争いだって武力的なのです。そういう意味で日本では、統治形態が秩序化しますから民衆にしたら息の根をとめられているみたいなどころがあるわけです。それ以前の室町や安土桃山などの絵画にしても自由奔放で個人が前面に出ているわけですが、江戸になるとひそやかな形式美

の中へ閉じ込められてしまっていますよね。

## 明治時代の精神的「暗転」

岩崎　ただ、そういうなかから江戸時代の末期に町人層を中心に自由な思想が展開したということも興味深いですね。やはり、商品経済の全国的ネットワークの形成と在地の生産力の上昇に支えられていたのでしょうか。しかし、その流れが明治近代に十分生かされなかったことが日本の近代の悲劇だったのではないのでしょうか。武家政治の天皇主義的編成替えによる近代化、資本主義化に終わったわけですから、神島二郎や司馬遼太郎がいうところの明治末期の「暗転」も必然的だったのでしょうか。

大野　「集団エゴイズム」とか「玉碎の美学」などと言われる精神的暗転ですね。日本人の場合、執ような論理的思考が突如として放棄され、情動の世界に身を委ねるという特徴がありますからね。

岩崎　ええ。それに関係するのですが、最近おもしろい本を読みましてね。信濃憂人訳編の『支那人の見た日本人』（青年書房）という昭和一四年に発行されたもので、当時

の中国で知識層が日本人について書いたものを翻訳、編集したものです。一ページ分のカットや伏せ字が部分的にあるものですが、中国人の意見が忌憚なく述べられています。一つだけ紹介しますと、伝仲濤という人の「日本民族の二三の特性」では、日本では鎌倉幕府以来六七五年間の武家政治が続き、日本民族の思想精神に決定的な影響を及ぼしており、「その好い方面の影響としては、尚武、有為、果敢、積極、剛毅、緊張、真面目などの特性を養成したことであり、好くない方面の影響としては残忍、殺伐、性急、小器の欠点を形造ったことである」といっているのです。

そして、「日支間の今までの悪感情は大半は日本人の性急で度量が小さいという欠点のために起こってきたものである」といっています。この性急で度量が小さいという点は、司馬遼太郎氏もNHKテレビ雑談「昭和への道」で言っていたことですが、さきほど議論があった日本人の思想的未成熟ということと関連しているようで、考えさせられます。

## 女が生きにくい日本社会

司会　面白そうな本ですね。あ、それではどうぞ西川さ

ん。

西川　今までのお話を聞いていますと、私のこれまでの生活実感ですが、日本という国は非常に女が生きにくい所だということと関係があるように思いますね。たぶん家父長制と関係があるんだと思いますが、ヨーロッパと日本の前近代は同じように家父長権が強いわけですが、ヨーロッパの場合は近代になって個人としての人權が確立するのにたいして、日本の場合はまだそれがかなり不十分だと思えますね。雇用機会均等法にしても男のように仕事をするならばという前提がついてまわっているようですからね。

岩崎　村上泰亮氏たちが『文明としてのイエ社会』で言っていることがそれなりに当たっているとすれば、現代の企業社会も武家の「お家（イエ）」原理を機能化することによって編成されているわけですから、女性の地位が低いというのも当然ということになるのでしょうか。ただ、さきほどの中国人に映った日本人の姿では、ともかく日本で素晴らしいのは女性である、といっているんです。日本の女は素晴らしいのに、日本の男は見る目がないということなのでしょうか。（笑い）

## 「新人類」のイメージ

司会　それでは、話題をそろそろ「新人類」の方に移そうと思います。まず、皆さんがどのようなイメージで「新人類」をとらえておられるか、をお伺いしたいと思います。古川（信）　伸び伸びとして、頭の回転が速い。割合と素直であり言われたことはするが、一歩進んで自ら何かをしようとする所が少ない。その他、ファーストフードをよく食べる、機械に強い、といったところでしょうか。

田中　社会のルールを守り頑張ることが自分達にとって価値のないことであること、今の社会が忌まわしいものであること、けれども大人達にとって「良い」若者になっていくこと、をフィーリングで感じ取っていて、古い価値観にしばられずにマイペースの生活をしようとしている青年達という印象です。

細川　社会や会社に忠誠を尽くす「旧人類」とは違って、ゴーイング・マイウェイで、割り切りがはっきりしている。そういう意味では会社にとって、使いにくい。その分、自己中心的で他人への思いやり、協調性に欠ける。流行に敏

感だが、感覚的、刹那的でもある。新しいメディアをどんな使いこなす、というイメージです。

滝 感覚が翹んでいてアイデアが豊か。自分の生活を大事にする。切り替えが速い、けれどもその分、物事への取り組みが表面的であり、既存のシステムになじみやすいのはよいが、優等生すぎる。男女の意識が希薄、といったところです。

黒田 自分を大切にします。どろどろした人間関係を好まない。日本酒があまり好きではない(笑い)。物事の判断基準を感性に置く。敬語を使うことが苦手、という感じですよ。

## 「新人類」の反撃

司会 どうも有り難うございました。かなり共通のイメージが出されたように思うのですが、それでは当事者である「新人類」の方々(笑い)の意見をお聞きしてみたいと思います。

木田 私達はやっぱり気持ちというものをすごく大事にしているんですけれども、うちの親などは、結果としてそれが形にならないダメなんだ、というわけです。もち

ろん、それは一理あることなのですが、もう少し気持ちのプロセスを理解してほしいと思っています。

渡辺(吉和) 私自身二二歳でして、「新人類」というには年をとっているんじゃないかと思うのですけれども(笑い)、なんていうか、「新人類」という言葉自体もうはやっていないというか、「新人類」について議論すること自体もう「新人類」にとってはグサイことだという(笑い)感じがするんです。まあ三〇代、四〇代、五〇代の人達は、若い人達のことを「今頃の若いもんは」という代わりに縮めて「新人類」といつているだけではないかと思えますね。「新人類」について何か言えといわれても、自分で「新人類」と意識していないんですから、答えようがないわけです。

古川(雅) 僕は卒論で若い世代の企業人の意識をテーマにしているのですが、いつの時代でも「今頃の若い者は」という世代間ギャップはあったと思うのです。しかし、「新人類」が問題になっているのは、たんに世代間ギャップではなくて、高度経済成長という大きな社会の転換期が影響しているように思います。

過 日本に来てからよく「新人類」「旧人類」という話を

聞きますが、よくわかりません。若いから「新人類」であるという感じがありますが、若い人でも遅れた意識をもっている人がいると思いますから(笑い)、よくわかりません。ただ、「新人類」があまり良い意味で言われているのではない、なにか皮肉的な言葉であるというように感じますけれど、どうなのでしょう。

西根 いやあ僕も「新人類」というのはとりあえず皮肉の言葉だと思えますね。渡辺さんがさっき言ってたみたいに、僕らは「新人類」というような気持ちはないし、僕は自分では盆と暮れの付け届けは欠かさずほうがいいかなと思ってくらいますから(笑い)、けっこう「旧人類」の形を守りたいほうなんですけれど、いわゆる「旧人類」の人が僕らにたいして言うのは、「こいつらは何でもかんでも肯定してしまつて、すべてのものに関してあきらめがある」というか、そういうところから「やれ新人類はどうの」と言っているのではないかと思えます。だいたい僕らの周囲にあるものというのは自分らよりも先に生まれているものですから、テレビなんでものも生まれたらすぐに茶の間に座っていたわけですから、肯定、否定というか新たに考えるものがないといった感じなんで、しょうがないから自分のし

たいこととかも、うちよつと身近なところ、趣味とかファッションとかに気を配っているのです。だから「新人類」をこういうふうにしたのは、今「新人類はどうの」といっている、ちよつと昭和一ケタとか一〇年代くらいの人達だと思えますね。(笑い)

古川(雅) 僕はいま就職活動の真つ只中なんですけど、同じようなことを感じますね。僕たちはよく「個性がない」という言われかたをするんですが、ですから最近人事部の方たちに、私卒論でこういう研究をしているのですが、企業はどういう人材を要求しているのですか、と質問するのです。そうすると、個性的な人とか、人とは違っていいからこれだけは自信を持っている人とか、そういうことをおっしゃいますが、けっこう人事部の方が採用するのはごく普通の、協調性のある、そこそこ仕事ができそうな人なんです。まあ人事部の人たちにとつても、個性的な人間というのを採つて、成功して当たり前、失敗したら何を言われるかわからないというところがあるのだと思いますけれど、悪い言い方をしたら、僕らの個性の芽を摘み取っているのは彼ら大人達ではないかということですね。

坂本 企業社会では、高度成長を成し遂げてきた企業が、

「成熟の時代」とか「低成長時代」とか言われる中で、大きく様がわりしたのではないでしょうか。外注をも含む専門職制度とか専門的経営管理者の育成・スカウトなどが「家族的」といわれる「日本的」経営の中にいた人々に動揺を与えている。高度成長下の競争原理にかわって今はそういう形で「社会」の側の動揺が、そのまま子供への過度の期待となつて、受験戦争・教育の荒廃をもたらししている。個性の表現の仕方を教えられないままに社会に送り込まれてきた若者、彼等を不可解だといって、とりあえず「新人類」と呼んでいる、とは言えないでしょうか。

## 社会全体を問えない「混沌」

司会　　だいぶ「新人類」からの反撃がありました。それでは「旧人類」の方からのご意見をお伺いしましょう。

長谷川先生いかがでしょう。（笑い）

長谷川　　私はもうやっぱり「旧人類」ですか。（笑い）

古川君が、「新人類」というのは単に「若いもん」ではないとおっしゃいましたが、それは確かにそういうところがありますね。少なくとも明治維新以来、日本は常に大きな

波を経てきたと思うんですね。たとえば、私の祖父は明治元年生まれです。そうすると成長期はやっぱり文明開化の時代ですから、それはもうヨーロッパ志向だったわけでしょう。そうするとまさに江戸時代生まれのおやじは自分の息子を見て何と想ったでしょうか。それから、私の父が明治四〇年に生まれますが、その青年期はやっぱり大正デモクラシーです。もちろん、ヨーロッパ志向の祖父といえども天下国家の国家論ですから、大正デモクラシーの日常生活のなかでの近代化などは何か骨がないという感じを持つていたふしがあるわけです。そして、今度は私達が戦後に青年期をむかえたわけですが、父の世代からは「おまえらはアプレゲールだ」といわれるし、自分達も古い伝統や前近代的なものに猛烈な反発意識をもったわけですね。こうして見ると時代の節目節目があつて、世代間ギャップもそういう視点から見えていかないとわからないでしょうね。そういったことを踏まえた上で、それまでの世代と今の「新人類」の違いという点について言えば、社会全体をどうしますか、国家をどうしますか、といった、まさに歴史の方向性についての認識、関心が非常に弱くなっていることですね。なにか日常生活、私生活のレベルで大きな変化が起

こつてきたということでしょうね。

伊東 一回生の伊東です。そういう意味で、昭和二一年四月に小学校に入学し、丸ごと戦後の昭和史を生きて大きな時代の転換期を実感してきたわけですが、実感した変化をどのように理解したらいいのか、うまくまとまりません。とりあえず「混沌」と言うことにしますが、日本人の生活意識の底流には二宮尊徳の「分度・推譲」の徳というのがあったと思うのです。つまり、「分度」は、その分限に応じて一定の限度内で生活し余裕を残すこと、「推譲」は、その余裕をたくわえて将来に備え、さらに窮乏にあえぐ人々に恵みを施すこと、ですが、そういう意識が日本人の共同体を支えるものであったと思うのです。しかし、急速な高度成長はそうした古い伝統的なカラを打ち破り、「混沌」をつくりだしたのではないのでしょうか。「混沌」は伝統にとらわれない自由を生み出すけれども、その方向性は定まらず、流れに押し流されて時には事大主義に陥りやすいのではないかと思います。

古来からの日本人の考えかたに弁証法が根付いていないこと、そして、大陸や欧米のすぐれた科学技術などの受容においての寛容性、それが時には清算主義的な方法で取り

入れられたために、伝統的なものの上に積み上げるというのではなくなってしまうのではないのでしょうか。古くからのものを見直すというのではなくて、それがすべて劣っているもので、外から入ってくるものを良しとする考え方、これが「混沌」をつくりだしている根本ではないかと思えます。

ですから、「新人類」は、「混沌」のなかで生まれ育ってきたものであり、「旧人類」はこの急激な「混沌」にふりまわされながらあくせくと生活してきたということで、そこに大きな世代間のズレを感じているのではないかと思えます。「旧人類」は、その子育てのなかで十分に伝統的な良さを教育ししつけることのできないままに、大きくなった「新人類」を見てその自由奔放な行動に戸惑い、いたずらに自分達とは異なる世代のあり方に困惑しているということなのではないでしょうか。

フケている「新人類」

司会 ありがとうございます。それでは、教員になられて一年余りの渡部さんいかがでしょうか。

渡部(幸子) 私自身どちらに属するのかわからないので

困るのですが、今の高校生について感じるのは、彼らにとつて「信念」だとか「主義」を持って生きるとか、行動することとはナンセンスで、一昔前の「若いもん」が合理的に割り切つてしまふのにたいして、行為に方針を持つことそのものが無意味であると考えているように思えます。適応能力は高いけれども、あくまで自分の好きなこと、必要なことに関してエネルギーを注ぎ、してもしなくてもいいこと、どうにかなることについては、むしろ徹底的に省エネの姿勢をとる。努力とか根性とかそんな言葉にアンティックな魅力を感じることもあるのですが、生き方としてはクサイ新劇のようだと思つている。もう少し言つと、「新人類」はヒッピーのような刹那主義とは違い、見通しはしたたかに立てるのであり、無鉄砲で爆弾をかかえているような従来の若者よりはむしろフケている。だから「若い」「老いてる」という二分法を年令を越えて使つたりするのも、このことと関係しているのだと思います。

岩崎 「信念」とか「主義」ということが言われましたが、そういうものは時代時代に何かに対立する拮抗感、緊張感から生まれてくるのだと思います。昭和一九年生まれ

という僕らの世代は、古い大家族主義、現実主義的欲望自然主義のような価値観に対抗し、戦後の民主主義の個人主義、理想主義というものを獲得する過程がそのまま自己形成の過程であつたという感じがします。ところが、現代の若者は物質生活の上で恵まれている一方、社会全体が管理主義、操作主義の世の中になつて、しかも価値というのアイデオロギーでもいいのですが、無機的になつてつかみどころ、対抗しようがないという状況にあるんですね。そういう意味で、「新人類」諸君は非常に苦しい位置にあると思うんですが、どうでしょう。(笑い)

太田 大きな問題にたいする緊張感がない、といわれるとたしかに日ごろそういうことを意識しないですね。日常のことに目が向いていて。私達だって何かを探しているということはあるんだと思うのですが、何を求め、何に対抗したらいいかわからないんです。どういう立場にあつて、どういうことを考えなくてはならないのが。

寺角 修士課程一年目の寺角です。確かに社会がソフト化して対抗せざるを得ないような対象が見えにくくなつていくようです。それと同時に、一般に、日常的なレベルで問題にならないことには無理してまで関わらないようにす

る態度があるように思います。それは単なるエゴイズムだけでなく相手への配慮から、ヒトゴトには敢えて踏み込まず距離をおくものです。更に付け加えれば、大上段に振りかぶった「主義主張」に何かしらうさん臭さを感じとり、身近なもの、日常感覚を大切にしようとすることも挙げられます。これはひとつ前の世代の新左翼運動などへの反動かも知れません。このような態度はおそらく「私生活主義」と呼ばれると思いますが、いずれにしてもこれは、社会のタガが緩んだ「混沌」への対応からより確かな日常生活を指向するなかで生まれてきたもので、それ自体は、理念的なものをもたない空虚なのですが、つかみにくい時代のなかで頭だけ先走りさせない生き方とも言えそうに思います。

## 大人達のほうが実は危ない

西根 先生達の世代の親たちは、もうちよつとどっしりと座って子供である先生達に対していたのではないですか。我々の世代の親や大人達は我々にたいして「何だこいつら」と思っているところがあって、僕なんかには「捨ててるな」

という感じがしますね。だから、対抗するものがないというのも大人達自身が対抗されるような何物かをもう失っているということではないのですか。「新人類がどうの」と騒いでいる方の人達の基盤が危ういんじゃないですか。

——ちよつと言いきりすぎたような気もするから、やっぱりのへんが「新人類」なんでしょね。(笑い)

大野 たしかに旧世代に不安感があるんですね。理解できない人と人間は不安ですからね。子供は親を理解できなくても済むのですが、親は子供を理解できないと済まないですからね。

長谷川 たとえば、志賀直哉の『和解』なんか見ても、親と子の間に世代文化が対立を引き起こしているんですね。ところが今は、同じレベルの対立ではなくて違うところでの断層になってきていますから、親と子が対立するのではなく、どっちもがそしらぬ顔になってきているわけですね。

## 女性と映像文化

古川(雅) 親の話が出たのでもう一言いわせてもらおうと、僕らの考えかた、感じ方に女性の価値観が強く浸透してい

るのではないかとことです。僕らのおやじの世代というのは、残業も単身赴任も辞さずに一生懸命働いてきた人たちですから、家庭は新しい形の母子家庭になっているんです。僕らには母親の影響が大きいです。それに、学校でも女性教員が増大して、僕も小学校六年間のなかで五年間は女性の先生だったんです。

大野 たしかにそうでしょうね。私自身はそんなに残業も単身赴任もありませんから、子供のことはもう少しわかっていいんですが、それでもわかりませんね。(笑い) とくに、感性みたいところで、たとえばロックがわかりませんね、あのリズムが。だからたんに物の考えかたとか思想にたいする態度の取りかただけではなく、からだとか感覚のレベルで追体験的に理解しないと無理なんでしょうね。

長谷川 それはそうでしょうね。これまでの我々の世代は活字文化、活字偏重文化といってもいいくらいですが、そうだったわけですよ。ところが、今の若い世代というのはもう映像文化なんです。そして、これは男尊女卑の文化と関係があると思いますよ。活字文化というのはどちらかというとと男性文化なんです。これにたいしてイメージや感

覚や映像は女性の文化です。前者が後者をこれまで抑圧してきたわけで、いま映像文化の反逆を受けているということになりますか。ですから世代文化の対立とか親と子の対立とかも、知性と感性のあいだの断層といったみたいなズレになっているわけです。今後、教育にたずさわる者としては若い人達の知性の構造の問題を考えなくてはいいけませんね。

大野 それでちょっと思い出したのですが、パーソナルと四、五人で直接話をする機会があったわけですが、彼は雑談は一切しないんですね。我々はコーヒーブレイクの時は少しくらい雑談をしますわね。しかし、しませんね。ヨーロッパの論理的執ようさね、あれは僕らはへき易するんです。そういう意味で我々日本の文化のなかにはそういうものに耐えきれないような、フィーリングとか優しさとか、そういうものがあつたんだと思います。

## イメージのなかのロジック

西川 そのことに関係すると思うのですが、日本の着物が  
が見直されているのです。国際的には円高文化という面も

ありますが、モレシャンさんとか外国人自身が興味を持ち始めています。国内的にも、コシノジュンコさんの着物の洋服化がある一方、若い世代ではレトロという形で広がっていますね。これなどは「新人類」が「旧人類」を理解しようとしている信号と受け取れないこともないと思います。歌舞伎とかの色彩感覚ですね、あれを新鮮に印象的な形で取り入れようとしているんだと思うのです。浅田彰さんとか俵万智さんとかはそれを活字で表現しようとしているのでしたが、「旧人類」に属する方たちがこういったことをもつと積極的に翻訳できれば良いのにとはいますね。

大野 それと関連することですが、オーギュスト・コントはイメージの論理と記号の論理ということを行っていますね。記号の論理のほうはパーソンズの逸話のところまで出てきたような普通の意味の論理ですが、たとえばあそこに掛かっている絵にもなんらかのロジックといったものはありますよね。感情とかフィーリングとかと結び付いたところの論理、それがイメージの論理です。アメリカなんかでは若者達がいるんな文化的な試みをしています、彼らは従来の知的文化に飽き足らず、そのロジックを越えていこ

うと悪戦苦闘しているんだと思うんです。ところが、神戸大学にしても他にしてもかっこうは同じようなんですが、日本の若者がフィーリングを通して新しいロジックの構築をやっているのかというと、どうもそういう実感が湧いてこないですね。その手前でとどまっている。そもそも日本の文化のなかでイメージの論理というのがそもそもどのようになされるかですね。

岩崎 そういう意味では、「新人類」だけに何か新しい可能性を待望するというのも間違いでしょうね。日本の文化の中心には美意識が据わっているとよく言われるわけですが、その美意識のなかにもロジックが明確にあったんだと思いますよ。それが、明治以降のがむしろな近代化のなかでゴチャゴチャになって、フィーリングがフィーリングとしてだけ残ってしまっているというようなところがあるんでしょう。

司会 話がだいぶ佳境に入ってきたところなのですが、時間が来てしまいました。予想以上のおもしろい議論になったように思います。皆さんどうもありがとうございました。

《追記》

この座談会を企画するにあたって、神戸大学インターナショナル・レジデンスの留学生の方々、そして当研究会の会員の方々の幾人かにアンケート形式でご意見をうかがいました。ご協力に感謝いたします。

また、設営、録音にあたっては院生の寺角良平君の、テープ起こしにあたっては学部生の杉田美紀、谷口典江、桐戸明宏、室田伸一、本村修造、宮崎香織の各君の協力を得ました。記して感謝いたします。